

現実と夢の実現

奨励	田中 達也〔たなか・たつや〕
奨励者紹介	同志社大学理工学部教授
研究テーマ	金属・高分子や複合材料の加工に関する研究

わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。

(フィリピの信徒への手紙 3章12―14節)

ただ今、ご紹介にあずかりました理工学部エネルギー機械工学科の田中です。奨励を始める前に今回の大震災で被災されました方々、および関係者の方々に心からお見舞い申し上げます。

私は、1979年に同志社大学工学部機械第二学科に入学し、工学研究科機械工学専攻を経て1985年の4月に神戸製鋼所に入社しました。その後、21年間の企業生活を経て、2006年に母校の同志社大学に入社しました。その間、神戸製鋼所ではプラスチックやゴム、金属などを加工するすなわち材料を形にする、現在風に言うと「ものづくり」をする産業機械の研究開発をずっと続けてまいりました。この間、色々な材料を加工する機械やプロセスの研究開発に携わってきました。現在はこの経験を財産に、大学側からは見えない企業の内情について、学生諸君に事前を知ってもらうことによって少しでも社会に出た時に役立ててくれればとの思いで指導しています。

ところで、会社での研究活動についてはさておき、その間に起こった一生忘れることができない大きな出来事に1995年の1月17日に発生しました阪神・淡路大震災があります。今回の地震の規模とは比較できませんが、今回の地震と同様に阪神間が壊滅的な被害を受けました。亡くなった方々6437名、家屋の全壊が約10万5000棟、半壊が約14万4000棟という大災害でした。私はその時、神戸市東灘区に住んでおりました。阪神高速道路が倒壊した現場は、この地震の象徴的な出来事として記憶に残っておられる方々も多いと思いますが、この倒壊現場から500mしか離れていないところに住んでおりました。

奨励にあたり、まずはこの時のことを話させていただきたいと思います。午後2時46分に発生した今回の大震災と違い地震の発生が午前5時46分の早朝でしたので、当然のことながら寝室の布団の中で被災しました。折り重なって倒れてきたタンスの下敷きとなり、一人では起き上がれず家内と協力して這い出したことを思い出します。この時は社宅に住んでいたのですが、寝室にしていた部屋も狭くてタンスが直接倒れてこなかったのですが、命が助かったのですが、直接タンスの下敷きになって亡くなった方々も多くおられたことを後で聞き、何が幸いするかわかりませんが、本当に幸運だったと思います。この時、家内は地震だと気づくと隣で寝ていた3歳の子供の上に折り重なっていました。今では20歳となって元気に大学生活をエンジョイしているのですが、そのようにして子供を守って自分がタンスの下敷きとなり亡くなったお母さんもたくさんいたということでしたので、母性本能と言うのは本当にすごいものだなあとあらためて感動したのを覚えています。そのような状況ではありましたが、家族全員とりあえず無事に表の公園に毛布を持って脱出・避難し、夜が明けるまで過ごしました。隣から聞こえるラジオの放送から大変な出来事が起こったことは分かりましたが、夜が明けるにつれて、辺りが見えてくると2階建ての家はほとんど無く、すべてが1階建てになっていました。何が起こったのかを理解するのに少し時間がかかりました。さらに印象的で今でも鮮明に覚えているのが、辺りの静けさです。東灘区というと阪神高速と騒音公害訴訟で有名になった国道43号線が平行に走っており、通常自動車はひっきりなしに往来しています。加えて阪神電車が同じところを走っているため早朝から夜中まで一日中かなりの騒音があります。ところがこの朝は、工場も止まっており、自動車、電車も動いていないので静かなのは当たり前ですが、スズメや鳥の鳴き声さえ聞こえてきませんでした。おそらく動物もどこかへ避難してしまっていたのでしょう。通常の雰囲気とは全く異なり、「静寂」とはよく言ったもので、別の世界にいるようでとても不思議な気分でした。

その後は、生き埋めになっている人をみんなで協力して助けたり、公衆電話に並んで取りあえず両親へ連絡したりと大変でした。今でも思い出しますが、このように必死で動いていると、全く空腹感がありませんでした。食欲がなかったのではありません。食べることを忘れていたのです。朝から何も食べていないのに気が付いたのは確か、夕方遅くなってからだと思います。そして、神戸市からの配給ももたえずに、近所の方々と少し残っていた食料を分け合って食べていた時に、会社の関係者の方々がお弁当とお茶を持って社宅まで運んで来てくれました。会社の工場内で亡くなった人は2名いましたが、比較的被害の少なかった加古川市の製鉄所から交通手段は無かったのですが、わざわざ砂利運搬船にお弁当とお茶を載せて神戸市内にある何力所かの社宅に配ってくれました。確か、ご飯に梅干しとコロッパ1個だけが入った簡単な弁当でしたが、本当においしい弁当で、この時ほど会社の有難さを感じたことはなかったです。企業は人が財産であるというのを実践していました。退職して会社は離れましたが、この時の感謝の気持ちは一生忘れられないでしょう。

その後は避難所には行かず、翌朝に自動車に乗って大阪に移動することができました。本当に脱出劇とはよく言ったもので、いつもは1時間で行けるところを12時間以上かけて必死で運転していたのを覚えています。この時も、タンスが折り重なって倒れてきたために命が助かったように、駐車場の塀で動けなくなっている自動車が多い中、塀に沿って置いていた自分の自動車が地震で二メートルほど塀から離れて移動していたために、幸運にも無傷で使用できました。この時は本当に神様が助けてくれたとしか思えないようなことがいくつもありました。そして、この時ほど普通の生活ができていたことがどんなに幸せなことかということを感じたことはありません。私は幸いにも避難所生活を送った経験はありませんが、今回の大震災でも、ニュースなどで被災地の様子が映し出されこれを見ると、当時のことが鮮明に思い出されて本当に胸が痛くなります。

神戸もまだまだ震災の傷は消えていませんが、15年以上経って最近やっと神戸らしくなって、人びとも普通の生活に戻ってきたような気がします。福島原子力発電所の問題があるので簡単には言えませんが、最も大きな希望であろう普通の生活を送れるようになるには最低でも10年は必要かと思います。気の遠くなるような、特に年配の人びとにとっては大変なことですが、希望を持って日々の生活を普通の生活に戻れるよう頑張ることしかないように思います。

ところで、この大震災で私自身が一番感じたことを一つ挙げるとすれば、多くの人びとがお亡くなりになり、自分がその中に入っているにもかかわらず状況にいたなかで命が助かったこと自体がその後の人生の大きな力につながっているということです。あんな大変な状況でも助かったのだからということが、その後の人生で何事にも前向きに考えられるようになったのではないかと感じています。今思えば、人生の転機というのはこういうことを言うのかもしれません。

一方、今回タイトルにしました「現実と夢の実現」ですが、この意味は現実を見据えていつの時でも夢と夢をもつて、その夢の実現に向けて精一杯頑張ることが人生のなかで最も大事ではないのかということをお願いして、タイトルとさせて頂きました。震災の復興も同様ですが、夢の実現もそれほど簡単ではありません。大きな夢ほど時間がかかります。しかし、夢を実現したときの達成感は言葉で表せないものです。ここで「現実」と「実現」という同じ漢字を使っているが、上下入れ替わっただけで意味が大きく変わる言葉について考えてみたいと思います。このような言葉は多くあると思いますが、「現実」の意味を調べてみると「いま目の前に事実として現れている事柄や状態」を言い、「夢と現実」「現実を直視する」「現実で起きてしまった事故」などと表現すると書かれています。対比語は「理想」ということになります。一方、「実現」の意味は「計画・期待などが現実のものになること、あるいは現実のものとすること」とあります。言語学から見れば、もっと色々な意味があると思いますが漢字が入れ替わるだけで、これだけ意味が変わることも興味深いところです。

そこで、私の場合の夢の実現について話をしたいと思います。大学を卒業し、会社に入り10年を過ぎた頃から、研究を通じて学位記を取得し工学博士になることが一つの夢として芽生えてきました。会社生活も10年くらい過ぎると結構将来像も見えてきます。つまり、入社当時に比べて夢を見ることが少なくなってきます。大学にそのまま残って研究を続けておれば、学位はもっと短い時間で取得できたかもしれませんが、周りの状況に流され就職し、年齢が上れば仕事の責任も重くなり、なかなか簡単に大学に戻って学位を取ることは難しくなっていました。さらに、結婚して子どもも生まれて家庭が安定してくるとより現実的になっていくのも仕方ないことです。私は10年ほどかかりましたが、幸運にも会社に行きながら取得することができました。あきらめようかと思ったことも何度もありましたが、あきらめることなく夢、この場合は目標と言ってもよいかもしれませんが、持ち続けることによって実現できたと思います。続けることができたのも、家族をはじめ周りの方々に感謝です。それを実現できた結果、今の場所に立っている。非常に不思議なことと思われるかもしれませんが、転職をしなければ、100%、チャペル・アワーのこの時間、この場にはいないでしょう。運命とはまさに不思議なものです。運命には逆らえないとは良く言ったものですが、逆らうのではなく自分自身で作り上げるものと考えるのと実に愉快ではありませんか。

私も機械の技術屋の端くれですが、ここで有名な発明王のエジソンの言った言葉を披露したいと思います。エジソンは、「チャンスは衣をかぶってやってくる。だから見逃してしまふのだ」と言ったそうです。実にうまく表現していると思いませんか。誰にでも平等にチャンスはやってくるものであるが、それを捕まえることができるか、見逃すかはその人の心がけ次第であるということです。私が学位も修得でき、この場に立って居られるのも、阪神・淡路大震災を体験し、九死に一生を得たおかげでこの衣を見抜ける目が備わっていたのかも知れません。おそらく一般的に言うと、なににごにつけても先ず自分なりの明確な目標をもって、いつの時でも前向きに物事を見ていれば、その衣をかぶった中身は自然に見えてくる。すなわちチャンスを逃すことなく握めることができるのだということです。

このようにチャンスの掴み方については、人生の教訓として多くの講演の場で、色々な方々が色々な表現の仕方、同様なことを言っておられます。そこで、私なりにそれらをまとめると、「現実と夢の実現」のためにはまず第一に、

①自分の夢、つまりは具体的な目標をもつこと。

これは、小さくても大きくても良いと思います。夢が大きければ時間がかかりますが達成感は大きく、小さければ短い時間で達成感が得られるでしょう。私としては誰かが言っているから、小さなことからコツコツと、野球で言えばホームランを狙わずにヒットで点を得る方が大事であると思っています。次に大事なことは、

②目標に向かってどんなことが起ころうが、何事にも前向きに楽しみながら対処する。

前向きにしていれば見えなかったことも見えてきますが、後ろ向きで後悔ばかりしては何も見えないばかりか、その先の対処方法すら分からなくなります。さらにここで強調したいのは、失敗しても前向きに取り組んでいれば、人間社会と言うのは必ず助けてくれる誰か、例えば指導者や協力者が現れるということです。そして、楽しく取り組むことです。人

間、楽しくなくてはなにことも長続きしませんし、「好きこそものの上手なれ」という言葉があるように、嫌なことはいくら時間をかけてやっても身に付きませんが、やっていて楽しいことは必ず上達します。そして最後に大事なことは、

③絶対に最後まであきらめない。

最近の学生諸君を見ていると、このあきらめがとても早いような気がします。ディズニーの世界ではありませんがDream Come Trueを信じていれば、あきらめと言う言葉は必要ありません。たとえその目標の達成に時間制限があったとしても、最後まであきらめないことが重要です。当たり前のことかもしれませんが、私はこの三つの条件ができたときに初めて「夢が実現する」、すなわち「現実のものにできる」と言うことになるのではないかと思います。

先ほども言いましたが、会社で働きながら学位を取るというのは、周りの協力も必要ですし、本人自身があきらめればそれで終わりです。実は2002年の春に親父が亡くなったのですが、親父は息子が博士になることをとても楽しみにしていました。ギリギリではありましたが、亡くなる2週間前に、前日卒業式で受け取った学位記を病院のベッドで見せることができました。私も一生後悔せずにすみましたし、唯一の親孝行ができたのではと満足しています。会社での研究開発においても、これらをモットーにして取り組んできた結果、いくつかの技術や装置を世に出すことができました。最近やっと特許報酬制度があって、報奨金を頂けるようになりました。おかしなもので退職してからの方が会社の役に立っているかもしれません。

今後も学生諸君には、自分の経験を踏まえて指導していきたいと思っています。本日はこのような機会を与えていただき、本当にありがとうございました。

2011年6月22日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録